

## グスタフ・クリムト 《水蛇Ⅱ》 ——動植物モチーフから読み解く制作背景

山田耀

### はじめに

本論文では、世紀末ウィーンの画家グスタフ・クリムト（Gustav Klimt, 1862-1918）による《水蛇Ⅱ》（1904-07年、カンヴァス、油彩、80×145cm、個人蔵）<sup>(1)</sup>に描かれた動植物モチーフを分析し、その着想源を明らかにするとともに、本作の制作背景を検討する。

《水蛇Ⅱ》は世紀末に流行したファム・ファタールを題材とする作品で、80×145cmの横長の画面には、水中世界に横たわる4人の裸婦たちが等身大で描かれている。彼女たちは色鮮やかな大量の花々と黄金の水草によって飾られ、蛇とも蛸とも見える朱色の生物と絡み合う。背景にはカラフルな熱帯魚の群れや蛇が泳ぎ、華やかに画面を彩っている。黄金を用いた装飾、平面的な空間構成、そして世紀末的なエロティシズムが融合した本作は、クリムトが20世紀への世紀転換期に確立した独自の画風〈黄金様式〉を代表する作品の一つである。また、本作のような水と女性を組み合わせた画題は世紀末芸術において広く好まれ、クリムトもまた1900年頃から「水の女」を扱った作品を盛んに制作したが<sup>(2)</sup>、制作時期の最も遅い本作はその集大成と言える。

本作の先行研究の多くは、恍惚とした表情を見せる裸婦たちに焦点を当てている。彼女たちは同性愛や両性具有といった世紀末的概念を表現していると理解され<sup>(3)</sup>、フェルディナント・ホドラーによる《夜》（1889-90年、ベルン美術館）に描かれた裸体群像や、フランツ・フォン・シュトゥックの大蛇と絡み合う裸婦像など、同時代の象徴主義の画家からの影響が指摘される<sup>(4)</sup>。

一方、装飾や背景に用いられている動植物モチーフについては十分な検討がなされ

ないままであり、その要因は《水蛇Ⅱ》の複雑な来歴にあると考える。本作はユダヤ人のパトロンによって買い上げられたため、ナチス・ドイツがオーストリアを併合した際に所有者のもとを離れ、1964年の展覧会を最後に長らく所在不明となった<sup>(5)</sup>。その後、2022-23年にファン・ゴッホ美術館とベルヴェデーレが共催する展覧会「Klimt. Inspired by Van Gogh, Rodin, Matisse」において、約半世紀ぶりに公の場に展示された。本展覧会の図録に掲載された本作の図版と<sup>(6)</sup>、それ以前の出版物に掲載されてきた図版を比較するに、後者は実物の色彩や細部の描写、特に細かな動植物のモチーフを正確に捉えておらず、それゆえに先行研究では議論の中心に置かれてこなかったのだと考えられる。そこで、本論文ではこの動植物モチーフを重要な足がかりとして、本作の制作背景を探究する。

## 1. 《水蛇Ⅱ》の制作過程

はじめに、近年の新出資料を踏まえて、1903-08年における《水蛇Ⅱ》の制作から発表までの過程を検討する。本作は制作途中で大幅に加筆修正されているが、先行研究では加筆前の状態について当時の展覧会評による文字情報しか知られていなかった<sup>(7)</sup>。しかし、2022年からクリムト財団がグスタフ・クリムトデータベースにおいて資料の集積を進めており、その中に本作の加筆前の状態を記録したモノクロ写真が発見された<sup>(8)</sup>。そこで、本章では加筆前の写真を踏まえて本作の制作過程を改めて検討する。

クリムトは《水蛇Ⅱ》に関連する素描の制作を1903年から開始した。モデルたちが眠る姿、自慰に耽る姿、抱き合い快楽を共にする姿など、横たわる裸婦を題材とした50枚以上の素描が残されている<sup>(9)</sup>。本作が初めて公開されたのは、翌1904年の「第20回ウィーン分離派展」でのことである。本展覧会は裸体表現に焦点を当てたものであり、特に会場の中央に位置する第6展示室は、水浴などの「裸婦と水」を主題とした多数の作品が展示されたことから「中央浴場」と呼ばれた<sup>(10)</sup>。ここで、新出資料である第6展示室を撮影したモノクロ写真を見ると、右から2番目に《水蛇Ⅱ》の姿が確認できるが、この時点では未完成である<sup>(11)</sup>。その後、1905年まで加筆前

の状態のまま、いくつかの展覧会に出展されたのち<sup>(12)</sup>、1906-07年にかけて大幅に加筆修正され現在の状態に至る。完成版は1908年にクリムトラが主催した大規模な展覧会「クンストシャウ」にて初めて公開され、1911年にユダヤ人のパトロンによって買い上げられた。

ここで、先に言及したモノクロ写真に写る《水蛇Ⅱ》(以下、1904年版)と完成版を比較し、加筆による変更点を確認する。両者の最大の違いは裸婦であり、1904年版のうつ伏せの裸婦は、頭部だけを残して画面下方に描き直された。修正後のうつ伏せの裸婦は鑑賞者を画中に誘惑するような表情へと変更され、プロポーションは体の曲線が強調されてより豊満になり、陰毛までもが描き加えられている。残された画面右上の頭部の横には、黒髪の女性の頭部が追加され、裸婦の人数は二人から四人へと増加した。

動植物モチーフに目を移すと、完成版に描かれた大量の装飾的な花や金色の水草は1906-07年に加筆されたものであるとわかる。画面右上には蛇の頭部も追加されている。海洋生物にもいくつか変更があるが、1904年版の細部が不鮮明なため、展覧会評の作品記述で補いながら比較すると、1904年版のうつ伏せの裸婦の頭部に重なるように描かれていた細長い魚の群れは削除され、上側の裸婦の頭部に描かれていたヒトデも花に置き換えられている。また、背景を泳ぐ熱帯魚も配置や配色が変更されている。総じて、1904年版の方がより純粋な水中世界を描き出していると言えよう。続いて、加筆前の展覧会評における作品記述のうち、《水蛇Ⅱ》の制作意図を考察する上で示唆に富むものを二つ紹介する。

もしも年老いたジュール・ヴェルヌが再び神秘的な海底旅行に出るのなら、その時は私も一緒に連れて行ってと頼んでみよう。そうすれば、クリムトの《水蛇》をもっと理解できるのかもしれない<sup>(13)</sup>。

第一に、上記の記述は南洋という舞台設定を明確に表していた加筆前の本作がジュール・ヴェルヌの海洋冒険譚を鑑賞者に想起させていたことを示す。これは大衆紙に掲載された記事の一節であり、世紀末のドイツ語圏においてヴェルヌの作品が既に普及

していたこと、さらにクリムト自身も彼の作品を読んでいた可能性を示唆する。

クリムトは《水蛇》と名付けた、新たな絵を描いた。[...]空間的には、それは画家の誇張された《金魚》の横方向の対作品として表現されている<sup>(14)</sup>。

第二に、上記の記述は《金魚》(1901-02年、カンヴァス、油彩、181×67cm、ゾロトゥルン美術館)との連作関係を加筆前の《水蛇Ⅱ》に見出すものである。《金魚》は本作以前にクリムトが制作した「水の女」の一つであり、詳細は後述するが、スキャンダルを巻き起こしたために当時の人々によく知られる作品であった。本作の加筆前後を比較すれば、《金魚》との類似点は加筆後の方により多く見られるため、1904年版の時点で両者の対応関係が明白であったのならば、クリムトは加筆によって本作をさらに《金魚》へ似せていったことになるが、この点については第3章で改めて検討する。

## 2. 動植物モチーフの分析

### 2-1. 水蛇

本章では、《水蛇Ⅱ》の動植物モチーフを「水蛇」「熱帯魚」「植物」に大別して、これらの描写を詳細に分析した上で、その着想源を明らかにすることを試みる。

はじめに、本作のタイトルにもなっている水蛇を取り上げ、水蛇が単なる生物ではなく重層的な意味をもつモチーフとして描かれていることを示す。そもそも、ドイツ語の原題 *Wasserschlangen* は多義的な語であり、現実世界で水辺に生息する蛇を意味するだけでなく、ギリシア神話に登場する九つの頭をもつ怪物ヒュドラなどの神話上の蛇も表す。同様に、本作においても、画面右上の朱色と金色の側面観の蛇の頭部は、実際に存在する生物としての水蛇である一方で、画面左上の裸婦を囲む朱色の触手は、吸盤を思わせる模様から巨大な蛸にも見える大蛇であり、神話上の怪物として描かれている。

ここで、後者に焦点を当て、蛇と蛸のダブルイメージの着想源について考察を加える。クリムトは本作の制作にあたり、図像面ではシュトゥックに由来する蛇と絡む裸

婦像と、葛飾北斎に由来する蛸と絡む裸婦像の両者から靈感を受けたことが第一に推察される。また、このダブルイメージはヴェルヌによる小説『海底二万里』を通じても理解できる。

血とタコの墨の流れる甲板を跳ねる大きなへビの胴ほどもあるタコの腕に、わたしたちはめっちゃめっちゃに攻撃を加えた。ねばねばするタコの腕は、ヒドラの頭のように、切っても切っても生えてくるような気さえした<sup>(15)</sup>。

ヴェルヌはこの小説で海の怪物クラークンの触手をヒュドラに喩えており、蛸と蛇の怪物はヒュドラ、すなわち *Wasserschlangen* を媒介に結びつけることができるのだ。さらに、これが複数形である点に留意すると、原題が指し示すのは四人の裸婦たちでもあり、彼女たちに神話上の怪物が仮託されていると解釈できる。

## 2-2. 熱帯魚

続いて、熱帯魚モチーフに焦点を当て、熱帯魚の種類を同定した上で<sup>(16)</sup>、その図像源泉が同時代の博物学研究の成果物であることを示す。

《水蛇Ⅱ》には重なり合ってパターン化された熱帯魚の群れが二つ描かれている。第一に、画面右上の魚群は、ツートンカラーが特徴的な魚（頭部が金色、胴体が黒色）から構成されている。第二に、画面左の二人の裸婦の間を泳ぐ魚群は、色違いのツートンカラーの魚（頭部が金色、胴体が青色）と、小さな金銀の丸い魚から構成されている。これらの奇抜な熱帯魚は決して空想の生物ではなく、現実世界に存在する魚がもとになっている。

まず、ツートンカラーの魚の同定を試みる。そもそも、「水の女」の中で《水蛇Ⅱ》の他に熱帯魚が描かれた作品は《金魚》のみであり、その画面上部の背景には《水蛇Ⅱ》によく似たツートンカラーの熱帯魚の群れが泳いでいる。両者はおおよその形こそ類似しているが、《金魚》の方には目の上に黒い斑点があり、《水蛇Ⅱ》の方は鰭が赤く着色されている点で異なっている。これらの特徴から、ソメワケヤッコとヌリワケヤッコの二種が候補として挙げられる。両者は体の配色が黄色と黒または紺のツ-

トンカラーだが、ソメワケヤッコは目の上に黒斑がある一方で、ヌリワケヤッコは鰭の一部が赤いという特徴をもつ。つまり、《金魚》の制作時は前者のみが参照され、《水蛇Ⅱ》の制作時に後者の特徴も取り入れたのだと考えられる。また、《水蛇Ⅱ》に描かれたもう一種類の小さな熱帯魚については、本作以外に類例がないものの、口先部分の尖った円盤状の形態からディスカスという熱帯魚であると推測される。

では、これらの熱帯魚モチーフの図像源泉はどこにあるのか。クリムトが生涯で描いた数千点の素描の大半は女性を対象としたもので、作品のモチーフや構想を描き留めていたスケッチブックもその殆どが第二次世界大戦下に失われているため、人物以外のモチーフの着想源には不明な点も多い。しかし、これらの熱帯魚はヨーロッパ列強が植民地とした地域に生息する種であり、18-19世紀に加熱した植民地での博物学研究の成果物がその図像源泉であると推測できる。

実際に、オーストリア国立図書館の所蔵品のうち、ソメワケヤッコは南洋の魚に関する研究書<sup>(17)</sup>に、ヌリワケヤッコは子ども用の博物図鑑<sup>(18)</sup>に図版として掲載されており、ディスカスも博物画<sup>(19)</sup>などにその姿が記録されていることが確認できる。クリムトは生前の蔵書目録が存在しないため、参照元をこれらに断定できるわけではないが、当時のウィーンにおいて熱帯魚の画像が入手可能であったことは確かである。また、書籍の図版に見られる誤植が《水蛇Ⅱ》に反映されていることも、クリムトが博物学資料を参照したことを裏付ける。というのも、本来ヌリワケヤッコは背鰭と胸鰭のみが赤いのだが、先に示した子ども用図鑑を含む一部の書籍には尾鰭まで赤く描かれた図版が掲載されている。クリムトの描いたヌリワケヤッコもまた尾鰭が赤いため、この系譜の図版を参考に描いたのだと考えられる<sup>(20)</sup>。また、本作の魚がいずれも標本のように鰭が閉じた状態であることも、これらの図像源泉が博物学資料にあることを根拠づける<sup>(21)</sup>。

### 2-3. 植物

続いて、植物モチーフの分析に移り、《水蛇Ⅱ》に描かれた多種多様な植物のうち形態が特徴的なものの種類を同定して<sup>(22)</sup>、その図像源泉が風景画の制作にあることを示す。

同定可能な植物として、第一に画面左上のブロンドヘアの裸婦の後頭部に描かれた、外側が青、内側が白の花弁をもつ花が挙げられ、この特徴的な配色からシネラリアであると考えられる。同様に画面下方の裸婦の頭部にも、外側がピンク、内側が白の花々が描かれており、形態こそ単純な円の組み合わせにまで単純化されているものの、その配色からシネラリアであると考えられる。また、これらは複数の花々が寄り集って描かれているが、これはドーム状に密集して花が咲く散房花序という本種の特徴を的確に表現している。シネラリアはクリムトが最も気に入っていた花の一つで、本作が制作された1905年頃から頻繁に作品に登場するようになり、最晩年まで女性を飾るモチーフとして用いられ続けた。

この他に、画面左上の裸婦の頭部にアサガオ（外側がピンクまたは青、内側が星形に白い五角形の合弁花）、画面中央の裸体に挟まれた空間にタンポポ（多数の花弁をもつ黄色い花）及びキキョウ科の花（花弁の先が五つに別れた紫色の合弁花）が描かれていることが確認できる。その他の植物は形態が簡略化されており、同定することは難しい。

これらの植物の図像源泉を解明する鍵となるのが風景画である。クリムトは自然豊かな避暑地ザルツカンマーグートで夏の間を過ごすようになった1897年から本格的に風景画の制作を始めた。1900年以降は毎夏アッター湖畔に滞在しており、風景画の大半はこの地で制作されている<sup>(23)</sup>。当初の主題は森林や湖を中心としていたが、《水蛇Ⅱ》の加筆期間と重なる1906-07年になると、花畑を題材とした風景画を描くようになる。クリムトにとって風景画は単なる写生ではなく現実世界の再構成を目指したものであり、花畑の風景画においても正面観の花々をキャンバス全体に敷き詰めた平面的な構成となっている。これは《水蛇Ⅱ》の画面を埋め尽くす大量の植物モチーフにも共通するものであり、花畑を描く中で獲得した表現を《水蛇Ⅱ》に応用したのだと考えられる。また、先に同定した《水蛇Ⅱ》の植物はいずれもオーストリアで自生もしくは栽培されている種であり、風景画の中に同種の植物が描かれていることも確認できる。例えば、《水蛇Ⅱ》と同時期に制作された《ひまわり》(1907-08年、ベルヴェデーレ)の画面下方にはシネラリアが描かれており、この他にタンポポやキキョウなどを描いた作品も存在する。以上から、風景画制作を通じた花々との接触が《水蛇Ⅱ》の植物モチーフの着想源の一つであると考えられる<sup>(24)</sup>。

### 3. 声明文としての作品解釈

最後に、制作過程と動植物モチーフの分析結果をもとに、《水蛇Ⅱ》の作品解釈へと踏み込む。クリムトは自身の作品について多くを語らず、画論や日記の類も残されていないが、発言や執筆を控える代わりに作品に意見を仮託している。例えば、クリムトが分離派結成初期に制作した《ヌーダ・ヴェリタス》(1899年、ウィーン演劇博物館)では、作品上部に詩人フリードリヒ・シラーからの引用を組み込み、「万人に好かれる必要はない」という自身の芸術への態度を表明している。論文内で何度か取り上げた《金魚》もまた、クリムトの声明文としての作品である。本作の元々のタイトルは《私の批評家たちへ》であり、挑発的な視線で鑑賞者に尻を向けた裸婦は、クリムトの作品、特に学部絵画を批判する人々への反抗的な意志を表している<sup>(25)</sup>。

ここで、第1章に立ち返ると、《水蛇Ⅱ》には《金魚》との連作関係を見出すことができ、これは1906-07年の加筆によって一層強まった。裸婦の数は《金魚》と同じ4人になり、作品を90度回転させれば、彼女たちの配置や髪色にも対応関係が見えてくる。加筆後の鑑賞者を誘惑するような視線や、豊満なプロポーションの臀部を大胆に露出する姿もまた《金魚》を彷彿とさせる。また、魚についても加筆修正によって両作に共通するツートンカラーの熱帯魚を中心としたものに変更された。

これらを踏まえると、《水蛇Ⅱ》の挑発的な視線や臀部の露出も、自身と対立する者たちへの声明文として解釈可能ではないだろうか。実際、本作が制作された1904-07年、クリムトは《金魚》の制作時以上に激しいスキャンダルの渦中にあった。それは、第一に学部絵画の返還をめぐる問題、第二に分離派の内部分裂で、後者の結果、1905年にクリムトを含めた分離派の主要メンバーは脱退を余儀なくされた<sup>(26)</sup>。これは、分離派会館という重要な展示場所の喪失を意味し、その後4年もの間奮闘した末に開催へとこぎ着けたのが、本作の完成版が初めて展示された1908年の「クンストシャウ」であった。このように、本作の制作時にクリムトが置かれていた状況を鑑みると、本作も《金魚》になぞらえた敵対者への反抗声明として解釈できると考える。

## おわりに

本論文では、動植物モチーフを中心に《水蛇Ⅱ》を分析し、その着想源を辿ることで、クリムトに自然への多様な関心を確認した。植物の図像源泉は風景画制作という個人的な経験にある一方で、魚や蛇は当時の文化的背景にその源を見出すことができた。今回は、主に博物学研究の進展と、海洋小説の普及に言及したが、他にもヨーロッパ各地で水族館が建設され、ウィーンにも自然史博物館が開館するなど、当時の社会はクリムトの自然への関心を湧き立たせるような事象で満ちていたのだ。感受性の強い画家であったクリムトは、古代から近代まで、東から西まで、様々な時代と地域の文化に影響を受け、それを自由自在に取り入れながら一つの作品へ昇華したが、《水蛇Ⅱ》もまさにそのような作品と言えよう。

## 註

- (1) 《水蛇Ⅱ》の図版は、現所有者である香港のギャラリー HomeArt が提供しているものを参照していただきたい。展覧会「Klimt. Inspired by Van Gogh, Rodin, Matisse」(2022-23年、ファン・ゴッホ美術館、ベルヴェデーレ)の図録または展覧会ホームページから閲覧可能。Fellinger, Markus, et al., ed., *Klimt. Inspired by Van Gogh, Rodin, Matisse*, Vienna, Belvedere, 2023.
- (2) クリムトによる「水の女」を主題とした作品群は、ウィーン分離派の機関誌『ヴェル・サクラム』に掲載されたイラスト《魚の血》(*Ver Sacrum*, vol. 3, 1898.)と、その絵画化《流れる水》(1898年、個人蔵)を出発点として、《金魚》(1901-02年、ゾロトゥルン美術館)、《鬼火》(1903年、個人蔵)、《銀の魚》(1902-03年、アルベルティーナ寄託)へと続き、《水蛇Ⅰ》(1904-07年、ベルヴェデーレ)及び《水蛇Ⅱ》(1904-07年、個人蔵)がその最終作となる。
- (3) Strobl, Alice, *Gustav Klimt: die Zeichnungen*, vol. 2, Salzburg, Verlag Galerie Welz, 1982, p. 67.
- (4) Fellinger, Markus, et al., ed., *op. cit.*, pp. 172-173.
- (5) Lillie, Sophie, *Was einmal war: Handbuch der enteigneten Kunstsammlungen Wiens*, Vienna, Czernin Verlag, 2003, pp. 1244-1250.
- (6) Fellinger, Markus, et al., ed., *op. cit.*
- (7) Strobl, Alice, "WATER PICTURES," Weidinger, Alfred, ed., *Gustav Klimt*, Munich, Berlin,

London, and New York, Prestel, 2007, pp. 85-89.

- (8) 以下の URL から閲覧可能。https://www.klimt-database.com (2025 年 11 月参照)
- (9) Strobl, Alice, *Gustav Klimt: die Zeichnungen*, vol. 2, pp. 67-101.
- (10) Hevesi, Ludwig, *Acht Jahre Sezession*, Vienna, Verlagsbuchhandlung Carl Konegen, 1906, pp. 462-463.
- (11) モーリッツ・ネール撮影「第 20 回ウィーン分離派展の展示風景」(1904 年、オーストリア国立図書館) 以下の URL からグスタフ・クリムトデータベース上で閲覧可能。https://gkdb.link/8877-3763 (2025 年 11 月参照)
- (12) 「オーストリア造形芸術家協会『分離派』展」(1904-05 年、リンツ) 及び「第 2 回ドイツ芸術家組合展」(1905 年、ベルリン) に出展している。
- (13) *Linzer Volksblatt*. No.294, Linz, 24/12/1904, p. 1. (拙訳) 補足として、クリムトの存命時、《水蛇Ⅱ》の作品名は一貫して *Wasserschlangen* (付番なし) であり、没後に付番のある作品名で表記されるようになった。
- (14) *Wiener Abendpost*, Vienna, 08/04/1904, p. 1. (拙訳)
- (15) ジュール・ヴェルヌ『海底二万里』(荒川浩充訳) 東京創元社、1977 年、498 頁。
- (16) 熱帯魚の同定には以下を参照。多紀保彦、他監修『新訂 原色魚類大圖鑑「圖鑑編」』北隆館、2005 年、654-655、663 頁。牧野信司、松井佳一『標準原色図鑑全集 第 17 巻 熱帯魚・金魚』保育社、1970 年。
- (17) Museum Godeffroy, *Journal des Museum Godeffroy*, Band 2, Hamburg, 1873, Taf. 39-B.
- (18) Bertuch, Friedrich Justin, *Bilderbuch für Kinder*, Band 3, Weimar, 1798, Fisch. XXV-3.
- (19) ヨーゼフ・ツェナー 《ディスカス》(19 世紀、オーストリア国立図書館)
- (20) この誤植のある図版の大元は以下の書籍である。Bloch, Marcus Elieser, *Naturgeschichte der ausländischen Fische*, Atlas 4, Berlin, 1785-1795, Taf. 425.
- (21) 《水蛇Ⅱ》の熱帯魚を敷き詰めたパターンのような表現方法は、コロマン・モーザーによる魚を反復させた装飾パターンからの影響も見て取れるが、紙幅の都合上、本論文では割愛する。
- (22) 植物の同定には以下を参照。林弥栄、古里和夫監修『原色世界植物大圖鑑』北隆館、1986 年、25-27、157、227、394、513 頁。
- (23) Benesch, Evelyn, “The Landscapes: a reconstructed nature,” Natter, Tobias G, *Gustav Klimt: The Complete Paintings*, paperback ed., Cologne, Taschen, 2022, pp. 377-378.
- (24) クリムトはジャポニズムの影響を強く受けており、アサガオやキキョウなどの植物が文様のように描かれていることから、日本美術もまた《水蛇Ⅱ》に描かれた植物の図像源泉の一つであると推察されるが、紙幅の都合上、本論文では風景画のみに着目した。

グスタフ・クリムト 《水蛇Ⅱ》

- (25) Natter, Tobias G. and Hollein, Max, *The Naked Truth: Klimt, Schiele, Kokoschka and Other Scandals*, Vienna, Leopold Museum, 2005, pp. 18-20.
- (26) C・M・ネーベハイ 『グスタフ・クリムト 素描と絵画』(水沢勉訳) 岩崎美術社、1998年、168-173頁。